

「誕生」の片隅から

澤村節子

菊川産婦人科(伊勢市)・助産婦

京都大学医学部付属助産婦学校

武田一子さんから急にバトンを渡されて戸惑っています。考えてみれば、これは昔からの彼女のやり方でありました。

彼女と私は京都大学助産婦学校の同窓生。あの古いだっ広い「お寮舎」で、1年間「同じ鍋の雑炊」を食べた仲でした。何事にも積極的で目立つ彼女。控えめに大人しくしているつもりでも、何故か目立ってしまう私。良きにつけ悪しきにつけ、2人は寮監さんの目壺に取られておりました。片や、れっきとした助産院の跡取り娘。こちらは戦災で母を失い、父と妹3人、伊賀の山里に引き揚げての俄百姓の総領娘。「仕送り」から言っても力量の差は歴然。ライバル意識は持ちながら、結局はいつも従わされるのは私。そして今回も。

当時、せめてもの抵抗はテストの答案を少しでも先に出すこと。横目で彼女の様子を見ながら早書きして、一足早く教室を飛び出す。それを見た彼女も、すぐその後を追う。「答案はよく見直して出しましょう」 答案を返す時、先生は2人の顔を交互に見ながらよくそうおっしゃいましたっけ。

お産婆さん

当時の京大助産婦学校では、開業の助産婦さんに従っての見習い実習がありました。私も生徒は、2名ずつその先生のお供をして在宅分娩の介助見習いにあたりました。あれからもう40年あまりになりますから、たぶん亡くなられたでしょうけれど、いかにも長年「お産婆さん」として慕われてきたことを偲ばせるお人柄の方でした。京言葉

も柔らかく、産婦さんと会話されるのを見ていると、この仕事を天職とすることに誇りを持たせてくださる感じがいたしました。

その先生が、分娩介助に行かれるのに、器具以外に必ず持参されるものがあります。それは鶏卵なのです。不思議に思って、ある時理由をうかがいました。「これはな、お産で会陰が切れた時、白身と薄皮を使こてひつつけるんに使うとええんやで。黄身は飲んでもうて力づけにしていな」お産は女に天が与えてくれた力。誰の力を借りんでもできるもん。私らはちょっとお手伝いするだけ……」この言葉、今も大切にしています。

誕生

日本赤十字山田病院産科病棟の準夜勤が、やがて深夜に交代するころ。「おーい！ お産や、お産や。早よう来てくれ」 O先生の大声が響きました。交代の準備にかかっていた私、驚いて詰所を飛び出すと、声は先生の宿直室のほうから聞こえます。産婦さんがそんなところに迷い込んだのかと大慌てで走って行くと、先生は宿直室の中。覗いて見ても、産婦さんの姿は見えません。「先生、産婦さんは？」「そこや、そこや。そのなかや」と布団を指します。はてミステリー？とばかり恐々見れば、なんとニャーンと、敷布団を出血で汚してうごめいていたのは猫の新生児でありました。若くてハンサムだったO先生、名声は猫の世界にも……。

さて、猫のついでにもう1つ。それは豚のお産です。友人の豚舎でのことですが、一度に十数頭、次から次へと生まれ出る豚児を拭うのが人間の役



割。臭気も忘れ夢中になりました。生命は相互に「誕生」で支えられているのですね。

徒競走

深夜、電話が鳴りました。「はい、日赤病院産科です」「陣痛が来たので今から出かけますが、主人が出張中ですので、お隣りの方の車に乗せてもらって行きますから」「はい、お待ちしますので気をつけて」と電話を置き、用意万端整え、待てど暮らせどなかなか来ない。何かあったのかと思っていたら、「今着いたんですけど、どうも生まれたようですわ」と、のっそり男性が現れた。さては、ここまで来るのに間に合わず、志摩病院か伊勢病院へ入院して生まれたのかなと思い、「どこで？」と尋ねる私に、「さあ、天の岩戸の辺りを走っていたころかな」

後は聴くまでもない。「天の岩戸」と言えば、ここまで少なくとも30分以上はかかるはず。さあ大変、ストレッチャーを引っ張って駆け出す。どこをどう走って玄関へ行ったのか。着いてみると車の中は血まみれ。ベビーは母親の下ばきの中。後から駆けつけた同僚と2人力を合わせストレッチャーへ乗せ、分娩室へ。冬のことで、何枚も重ねている下ばきを脱がせ、ベビーを引き出して蘇生。「オギャー、オギャー」と元気な産声を聴いたときには、全身の力が抜ける思いでした。

とっさに駆け出した私に追いつきかねた同僚は、この辺りでは、徒競走はいつも一番の人。「あんたがこんなに早よう走れるとは知らなんだ」と、フーフー言いながら「次の運動会にはリレーの代表にするからね」。「一所懸命」と言うけれど、人間

の生命を守ろうとするとき、人はその普段の能力を超える力を発揮できるものなんですね。ひょっとしたら、あの子も今は母親になっているかも知れません。

出会い

32年勤めた日赤病院を退職して、8年の歳月が経ちました。看護協会助産婦部会三重支部長や他の役割も長年させていただきましたが、病院では役職に着くこともなく、助産婦としてのみ、現場一筋に過ごせたことを、ささやかな誇りと思っています。退職後、乞われて産婦人科病院の宿直勤務を週1回程度やらせていただいておりますが、時々、日赤時代に「取り上げ」た、当時の「赤ちゃん」の分娩の介助に当たることがあります。もちろん、当時の「お母さん」もつき添って来られますから、何十年ぶりの「旧交」を暖めることになり、親子三代にかかわれる助産婦のこれこそ仕事冥利に尽きると言えましょう。

いろんなことがありました。いっぱい教育を受け、分娩に関する知識だってわれわれ助産婦顔負けの方が、いざ実際の場面では世間常識にも反するような見苦しさを見せられる。かと思うとそうでない方が、本当に見事な「お産マナー」で分娩される。助産婦の現場は、まるで人生の縮図のように思われます。人間の本質は、生命誕生の場で形成されるのではないのでしょうか。科学が発達し、コンピュータ万能と言われる世となっても、人間は人間、本質的には、やっぱり生物の一員だと思います。さきほどの大先輩「お産婆さん」の言葉を、いつまでも大切にしたいと思っています。